

タリバン政権の女性抑圧政策をめぐって思うこと

平井文子(アジア・アフリカ研究所理事)

女性を救うための戦争？—ジェンダー・オリエンタリズムの落とし穴

今から 20 年前の 9・11 米同時多発テロ事件は、アメリカ合衆国にとっては真珠湾攻撃以来の自国土への攻撃だったためか、その衝撃は米国全体を揺るがせ、その後しばらくは国中が愛国一色に染められるという異様な雰囲気であったと言われる。ブッシュ大統領（当時）が報復戦としてのアフガン戦争の大義名分を「反テロ」においたことはよく知られているが、実はもう一つの大義名分があった。それは「虐げられたアフガン女性の救済」であった。

確かに、当時のアフガニスタンのタリバン政権(1996～2001 年)は、誤ったイスラーム解釈と時代錯誤のイスラーム解釈に基づく女性抑圧政策（ブルカ着用強制、女性の就学・就労の禁止、外出時の男性親族の同伴義務、姦通男女にたいする石投げ/鞭打ちの刑の公開等）を行っていた。当時、アメリカではイラン、アフガニスタン、サウジアラビア、シリアなどイスラーム諸国における名誉犯罪（殺人）や強制結婚から命からがら逃げてきたムスリム女性による自伝小説や TV ドラマなどが数多く出回っていた。日本でも翻訳書がいくつか出版され、筆者自身、シリア人女性の書いた『生きながら火に焼かれて』という自伝書を買って読んだ。火傷の跡のある顔を隠すために仮面をつけた著者が訪日して、テレビインタビューにも出演した。そうした中、米国の女性団体が「ムスリム男性による抑圧からムスリム女性を救おう」というキャンペーンを繰り広げていた。これが 9・11 以後、反テロキャンペーンと手を携えて、米議会でのアフガン開戦承認への世論づくりに大いに寄与したと言われる。ローラ・ブッシュ大統領夫人もラジオで、アフガニスタンへの軍事介入を「女性を苦しめているタリバン＝テロリストとの戦いであり、それは女性の権利と尊厳を巡る戦いでもある」と語った（11月17日）。もちろん、タリバンの女性抑圧政策は断じて承認されるべきではないが、問題は、抑圧されたアフガン女性の救済がアフガン戦争の合理化に利用されたことの政治的文化的意味である。そこには先進国の人たちがイスラーム社会の女性問題をみる時の上から目線、ないし偏見とでもいうべきジェンダー・オリエンタリズムが潜んでいると指摘したのはアメリカの文化人類学者ライラ・アブー＝ルゴドであった。

米国人の母とパレスチナ人の父を持つアブー＝ルゴドは、9・11以後のアメリカで見られた「ムスリム女性を救え」の熱狂に違和感を感じ、『ムスリム女性に救援は必要か』（鳥山純子・嶺崎寛子訳、書肆心水、2018年）という本を書いた。著者は長年エジプトの普通の人たちと暮らした実体験から、イスラーム社会の多くの女性は、保守的な家族関係のなかに暮らしているかもしれないが、それらは欧米人が考えるようなイスラームによる抑圧とは異なるし、彼らが自分たちの価値観からムスリム女性をイスラームないしはムスリム男性の被害者のよう

に言うことに腹立たしさを感じてきた。そこには、イスラームに対する西洋人の偏見とムスリム女性に対する不必要な憐れみ、すなわちジェンダー・オリエンタリズムが存在すると指摘している。

「オリエンタリズム」とは、エドワード・サイードによれば、「西洋の東洋に対する文化的支配の様式であり、したがってそれはヨーロッパ人の自民族中心主義の所産にほかならない」という。この場合、オリエントとは、東洋一般ではなく中東、北アフリカのイスラーム的オリエントを指す。

映画「カンダハール」に見るタリバン支配下のアフガン



筆者自身が、タリバンによる支配の実態を具体的に知ったのは「カンダハール」(モフセン・アフマルバフ監督、イラン・フランス合作、2001年)という映画であった。当時、西側世界では、ブルカ着用強制がもたら女性抑圧の象徴として受け止められていた。20年後の現在は、女性の就学就労の権利が主な問題とされており、カブールから伝えられる映像では、女性たちの被り物(ベール)はイスラーム圏の他の都市と殆ど変わらず、色鮮やかなヒジャーブが本流である。

さて、映画のストーリーは、タリバンの拠点カンダハールに住む妹から絶望のため自殺するつもりだという手紙をもらったカナダ在住(亡命)の女性(主人公)が、急遽アフガニスタンに赴き、途中で出会ったあるアフガン人一家のトラックに同乗させてもらい(第4夫人を装って)カンダハールに向かうという設定なのだが、その道すがらの様々なシーン(タリバンの戦陣訓を教える神学校、地雷で

足を失った男たちがひしめく難民キャンプ等)が当時のタリバン支配下アフガニスタンの社会混乱、貧困、女性抑圧等の実態をよく表している。映画では、タリバンによる一般大衆支配のための目に見える方法が、女性に対するブルカ着用強要と男性に対する髭強要、男女隔離の徹底にあることが明らかにされている。当時、ブルカの存在を知らなかった世界は、頭の先からつま先まで全身を覆うブルカにかなりなショックを受けた。そもそもブルカは最大民族パシュトゥン人の女性の伝統的な衣装の一つで、タリバンは妻たちにブルカ着用を守らせる責任は夫にあるとした。ブルカは外から見れば色とりどりで美しくもあるが着ている女性にとっては窮屈だ。しかし反面、ブルカを着ている女性に男性は触れてはならない。映画では、警察に追われている男性がブルカを身につけて検問をくぐり抜ける等の「効能」も描かれている。男女隔離は医療現場にも強いられている。男性医師と女性患者の間はカーテンで仕切れ、問診は医師と患者の双方が見えるところに座った少年(患者の息子)を介しておこなわれている。医師は、カーテンにくり抜かれた直径10センチほどの穴から患者の目や口などを診察する。診察を終えた後、医師は患者に薬ではなくパンを与え、具合が悪いのは栄養失調のせいなのだという。その医師が付け髭だったことも明かされる。全体を通して、映画「カンダハール」は、アフガニスタンでの悲劇の最大の原因は、ヴェール着用強要や男女隔離より、長引く戦乱と貧困にあることを訴えている。

新しいアフガニスタンを！

今年8月15日に米軍が撤退した後、復権したタリバンが再びおぞましい女性抑圧をするのではないかという危惧がアフガン内外で高まった。メディアは、「タリバンに殺される～」という女性たちの悲鳴にも似た声を大々的に伝え、カブール空港からの米軍機での脱出騒ぎと、運良く国外脱出に成功した人たちのインタビュー記事が連日紙面を埋めた。また、9月8日に発足した暫定政権が包括的でなく(33人の閣僚のすべてがタリバンメンバー)、女性閣僚が一人もいないことを敢えて非難がましく指摘した。体制転換という重要な過渡期に、海外に置かれたアフガンの銀行資産は凍結され、国際機関による経済支援・民生支援が一斉にストップされてしまったため、経済危機と人道危機が人々の生活を脅かしている。こうした事情にはほとんど口をつぐみ、国外退避と女性抑圧ばかりに焦点を当てる西側メディアは、20年間に渡る米主導のNATOによるアフガン政策の過ちと失敗を棚に上げて、依然としてタリバンを悪者/敵とみなす偏見と植民地主義的スタンスを取り続けているとしか言いようがない。

とはいえ、米軍撤退とタリバン復権以後のカブールでは、ここ20年間に成長した中産階級の女性たちの一部がタリバンに対する恐怖を乗り越えてデモや集会をおこない、これまで通りの女性の就労権、就学権を認めるよう立ち上がっている。タリバンがこうした都市の女性たちの要求を謙虚に聞くとともに、この間大きな痛手を負った地方に住む中～下層女性たち(7割を占める)の生活・福祉・教育等の向上のための施策に早く取り組む必要があると考えられる。SNSが発達し、どこで起こった出来事でも瞬時に世界中の人々に共有されるという現代、タリバン自身も変化を遂げねばならないという試練の時を迎えている。今後のアフガニスタンにおける

ジェンダー平等への道は決して安易ではないだろうが、変化のプロセスを注意深く見守りたい。
(了)



NHKTV 「おはよう日本」2021年9月5日 より



カブールでの9月3日のデモに参加したアフガン人女性たち/HOSHANG HASHIMI/AFP/Getty Images